慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Amales Tripathi著, Vidyasagar : The traditional moderniser : 伝統に立って近代化をおしすすめた人
Sub Title	
Author	臼田, 雅之(Usuda, Masayuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1976
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.47, No.3 (1976. 4) ,p.93(261)- 97(265)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19760400-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

Amales Tripathi 著

Vidyasagar: The Traditional Moderniser
―伝統に立って近代化をおしすすめた人

Published by Orient Longman (Calcutta), 1974, pp. 112

著者オモレシュ・トリパティは一九二一年生まれ。現在カルカッタ大学インド中世近代史学科の主任教授である。一九五一年、フルブライト奨学金を得て、はじめてアメリカに渡り、コロンビア大学で修士学位をとり、ついでイギリスに向かい、ロンドン大学で研究を続け、博士号を授与された。コロンビア大学での研究成果は一九五六年に Evolution of American Historiography (1870-1910) として刊行されている。トリパティ教授は、この初期の研究において、史学史家として鋭い洞察力を既に十分示し、それは以後の研究の骨格の一つを形成するものとなる。(1) ロンドン大学での博士論文はやはり一九五六年に、「ベンガル管区における貿易と財政」(Trade and Finance in the Bengal Presidency, 1793-1833) として刊行された。これは、経済史家としての地位を確立するすぐれた研究であった。帰国後は、カルカッタの最名門校 Presidency College の史学科主任教授、Calcutta University の講師を兼任した後 Narendra Krishna Sinha 教授のあとを襲って現在のポストに就いた。トリパティ教授は College では経済学を修め、Ramesh Chandra Dutt の「インド経済史」に感動し、インド経済史の研究を生涯の使命と定め研究に従事、それは「ベンガル管区における貿易と財政」に結実したのであるが、その後更にインドにおけるイギリス資本主義の発展を研究しようとした時、イギリスにおいて資料の提供を拒まれるという事態に遭遇し、その研究を断念、政治史の研究を始めた。一九六七年刊行の「過激派の挑戦」(The Extremist Challenge) はその成果である。この経済史を背景に、イデオロギー的政治史的分析を行った本は、一八九〇年から一九一〇年の「過激派」の擡頭期を理解するためには、欠くことのできないものである。トリパティ教授は現在、ガンディの時代の政治史を研究しており、一九七四年四月にはロンドン大学の School of Oriental and African Studies に招かれ、ガンディについて講演をしている。現在のガンディの時代の政治史研究と「過激派の挑戦」の間に位置するものが、一九七四年刊行の本書「ビッダーシャーゴル――伝統に立ち近代化をおしすすめた人――」である。

本書は、一九七〇年にビッダーシャーゴルの生誕一五〇年を記念して書かれたものである。一〇〇ページほどの小冊であるが、非常に緊密かつ刺激的な論述が見られることは、他の著書と変わりがない。トリパティ教授はこの研究の動機を自分がビッダーシ

ャーゴルと同郷のシドナプル県の出身であり、同じく教育を使命とする者だからと述べる。そのほかにも教授の夫人、ディプティ・トリパティは、ビッダーシャーゴルが設立当時から深く関与した Bethune College (3) のベンガル文学の教授であり、現在は学長の地位にあることも無視できないと思われる。人が研究テーマを選ぶ際の個人史にまつわるこうした理由は、些細と言えば言えようが、評者は研究の一つの大切なモメントであると考えるので、あえて紹介の労を厭わなかった。

一方、「過激派の挑戦」で分析された、ボンキム・チョンドロ・チョットトーパーッダエ、ビベーカーノンドの背景に焦点をあてるとき、つまり一九世紀半ばのベンガル社会を取りあげる時、大きくクローズ・アップされてくるのが、イッショル・チョンドロ・ビーダーシャーゴルなのである。本書では、教育者としてのビッダーシャーゴルには、第三章「教師そして学校経営者」、第四章「ビッダーシャーゴルと普通教育」、第五章「ビッダーシャーゴルと女子教育」があてられ、第六章では「社会改革者」としてのビッダーシャーゴル、第七章では「ビッダーシャーゴルとベンガル文学」が論じられる。最終章、第八章は「孤独なプロメテウス」と題され、ルネサンス以降の西洋思想の変遷を辿りつつ一九世紀ベンガル社会におけるビッダーシャーゴルの位置が導き出されて来る。ビッダーシャーゴルのベンガル社会に占める位置は、単なる教育者、社会改革者、文学者（広義での）の域を超えて、貧しい村のバラモンから身をおこして大学者となり、苦境にある者にはいかなる犠牲を払っても庇護の手をさし伸ばさずにはいられなかった慈悲の人として敬愛され、ベンガル語で書かれた伝記的研究は数多い。ところで、英語で書かれたものとなると、伝記のいくつか、及び各論的小論稿を除くと、ベンガル語における研究と比較すると手薄であった。トリパティ教授も指摘するように、ビッダーシャーゴルの人となり、あるいは業績が、たとえばマルクス主義的理解の機械的適用を許さないものであるということも、その理由のひとつかもしれない。つまり、ビッダーシャーゴルのベンガル的色彩の強さが、全インド的視野で捉えようとする（英語で書こうとする）時、意外に困難であったためと思われる。その点で、ベンガル語での研究を踏まえて、トリパティ教授がこのコンパクトな研究書を公刊したことは適宜にかなったものであるということができよう。

トリパティ教授は、ビッダーシャゴールの位置づけを、簡略に言えば、ラームモホン・ライとボンキム、ビベーカーノンドの間になす。彼らをつなぐ糸は何か。それは本書の副題が示すように、伝統にあくまで立脚しながら、伝統を近代の地平に見合うように発掘し再検討していく立場である。Young Bengal といわれる一八三〇年代、四〇年代のグループのように、全面的に伝統から切れてしまうのではなく、いわば伝統の内部から近代を漸進的に形成していこうとするものであった。トリパティ教授は、一九世紀ベンガルを理解するのに従来使われて来た「ベンガル・ルネサンス」論を全面的に斥ける見解をとって来たが、本書では、

これに代わる理解装置として Thomas S. Kuhn のパラダイム論の適用が有効であろうと示唆する。このアメリカを中心に流行のパラダイム論は、確かに「ルネサンス論よりは柔軟性のあるものに思われるが、トリパティ教授の意図は、既成の理論「通常科学」たる「ルネサンス」論に対して新たな独自のパラダイムを提出するというのではなく、既に現在する「パラダイム」論――伝統の可能性としてもつ柔軟さへの評価――のベンガルという特殊地域への適用というやや受身の姿勢にあり、それが、この意志的な強いタッチで彫り込まれた鋭い分析力の横溢する書に新しいパラダイムに接して時に覚える衝撃的な魅力を感ぜしめない原因があるのではなかろうか。しかし、ラームモホン・ラーイからガンディに到るインド近・現代史は、単に西洋的近代の踏襲という観点からは捉えきれず「伝統」が深く関わっていることは事実であり、その性格を明らかにする仕事はすすめられていく必要がある。トリパティ教授は、イギリス植民地権力の役割を、二面的に把握する。「一方において、それはある領域に近代主義の要素を導入するが、他面では現状を凍結する。その結果、地方間の発達地方の中での地域間の発達、地域内での階級及びカーストの発達に歪みが生じる。洋式教育の普及はエリートと大衆の間の溝をひろげる。サンスクリット化の過程は下級カーストの間で速力をはやめ、正統主義（正統ヒンドゥイズムを指す）は上層における社会改革の試みに激しく逆う。」[10] 本書はこうした環境の中から、インドの近代がどのように伝統に踏まえ、伝統そのものを組みかえ、次第に植民地権力と対決していくかを検討し直す契機となりうると評価できるだろう。ただ本書は直接この問題に答えるには小著であり、ここに引用した箇処に続くビッダーシャーゴルの環境への応答も、的を射たものでありながら、それ故かえってすんなりと流れてしまう面がないとは言い切れない。ただ、ビッダーシャーゴルにあっては、応答が空疎なおしゃべりに終わらず、自分に課した領域を守り、その中で能う限り実践する行為の人として捉えられている点は注目に値する。この点はスワデシ運動を経由してガンディに到るまでの広義の政治運動の研究に際しても常に留意されなければならないだろう。これは、カルマ・ヨガの問題として、インドの独立運動における政治と宗教の独特な接点を形成するものである。本書にもとりあげられているラームクリシュノのビッダーシャーゴルへのコメント[11]は、このことに関わる。トリパティ教授は、もしビッダーシャーゴルが宗教をもっていたとするなら、それは東洋風の霊的なものではなく、コントやミルの宗教観に近い、ヒューマニティの宗教であったとする。[12] また、それは、初期マルクスが社会主義の根幹にある要素として捉えた献身的ヒューマニズムであったとも説く。[13] ビッダーシャーゴルは「自分の全てを雨のように与え」た。[14] 本書の巻頭から響く、この無際限に自分を与え続ける果敢な献身的ヒューマニズムのテーマは、それが同時代に理解されることがあまりにも乏しく、また与えることが、窮極の霊的救済とビッダーシャーゴルの精神の内部でつながってはいなかったため、悲劇的に高まり、トリパティ教

授は、最終章において、アエスキルスの詩句とともに、孤独なプロメテウスのイメージでもって、その生誕一五〇年祭を記念して書かれたにふさわしい頌詞を、偉大な同郷の先輩に捧げているのである。

註

（1）好例として Trade and Finance in the Bengal Presidency 1793-1833 の序言における Ramesh Chandra Dutt の Economic History of India の批判をあげることができよう。

（2）Vidyasagar は一般にミドナプル県の出身と受け取られているが、彼の生まれたビールシンホ（Birsinha）は当時一八二〇年フーグリ県に所属し、一八七二年になってミドナプル県に編入されたことが本書六ページに紹介されている。

（3）a）本書第五章 Vidyasagar and Female Education. p. 46-55

b）Jogesh Chandra Bagal: "Women's Education in Eastern India" (Calcutta, 1956) The first phase, p. 79-96

c）Jogesh Chandra Bagal: 'History of the Bethune School & College (1849-1949)', "Bethune College and School Centenary Volume." (Calcutta, 1951) p. 23-29

（4）A. Tripathi: 'Bankim Chandra and Extremist Thought' in "Bengal Past and Present" Nos. 158, 159. (Calcutta, 1965-6)

（5）一九世紀中頃ベンガル語の詩を革新した Michael Madhusudan Dutt はたびたびビッダーシャーゴルの財政的援助を受けた人であるがビッダーシャーゴルをコルナシャーゴル（慈悲の海）とも母の心を持った人とも称えている。（本書 p. 5 及び p. 72 参照）

（6）最近のものとして二つを挙げておく。
Benoy Ghosh: Vidyāsāgar o Bānglālē Samāj（ビッダーシャーゴルとベンガル社会）(Calcutta, 1973) Indra Mitra: Karunāsāgar Vidyāsāgar (Calcutta)（週刊誌 Desh に連載後刊行されたが現在は絶版）Tripathi 教授は前者に批判的であり、後者を推賞している。（本書 p. PX 及び p. 74 参照）なお、Vidyasagar の著作集としては数種が刊行されているが、現在入手し易いものとしては Vidyasagar Rachana Samgraha, 3 vols. (Calcutta, B. S. 1379) がある。

（7）本書 p. 95-96

（8）本書 p. X

（9）本書 p. X 及び p. 75
A. Tripathi: 'Bengali Literature in the Nineteenth Century' in "The History of Bengal (1757-1905), p. 472-3, 511 (Calcutta, 1967)

（10）本書 p. 96-7

(11) 本書 p.94-5
(12) 本書 p.94
(13) 本書 p.98
(14) 本書 p.6

執筆者紹介

東畑隆介　慶応義塾大学文学部助教授
佐志伝　慶応義塾高等学校教諭
可児弘明　慶応義塾大学文学部助教授
浅井紀　慶応義塾大学院博士課程
臼田雅之　慶応義塾大学院博士課程・カルカッタ大学院留学中

（昭和51年3月現在）